# 吹田に残る 武田五一の遺産

新山ひろし

左の写真を見ていただきたい。ガラス窓からの光が床に波紋のように広がり、何とも言えない幻想的な光景をつくり出している。ガラスは、一枚一枚、手でカットされた特注のカットグラスであるという。眩暈を起こすくらい美しい。

ここは吹田市内本町にある旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）、その大座敷の広縁である。光の演出を仕掛けたのは、建築家の武田五一だと言われている。吹田市内本町の旧西尾家住宅では、昨年、『武田五一死後70年展』が開かれた。今回は、そのイベントの仕掛け人である、ボランティアガイドの米田堯さんに案内をしてもらうことができた。

大座敷　カットグラスによるスペクトルの光の散乱。あまりに美しい（午後2時の光）

京都帝国大学教授武田五一。ちょうど50歳頃か…長身で穏やかだが意気に感じるタイプだ

## 旧西尾邸に残る武田五一の作品

「とにかく、武田五一は天才だと思いますね。有名な建築家ではあるけど、同時に彼はデザイナーなんです。だから、細部に凝るんです」とガイドの米田さんは言う。

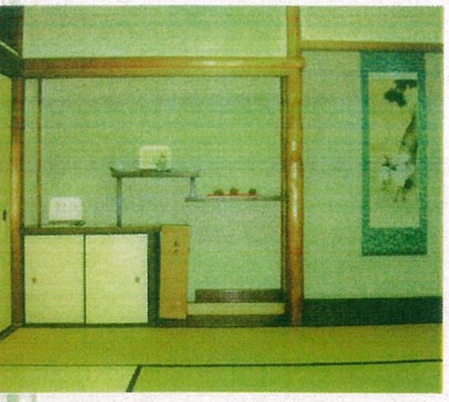
建築家武田五一は明治5年生まれで、昭和13年に死去。まさに、明治、大正、昭和の三代を生きた建築家である。彼の作品は、京都帝国大学、京都府立図書館、京都市役所を始め、大阪の銀橋、東京の日本勧業銀行の設計にも関与するなど、幅広く、しかも、一級である。

まず、「離れ」に案内してもらった。「離れ」は、和風棟と、それに続く応接室、ビリヤード室で構成される。和風棟は、一見、オーソドックスな茶室、しかし、応接室に入って驚いた。飾り棚に続くカットガラスの出窓、その上部にはステンドグラスに花鳥風月の日本的デザインが施されている。何とも華麗であり、かつ、渋い。これが「武田好み」、類例を見ない和洋折衷の様式である。

離れの応接室　出窓のカットグラス、ステンドグラスの花鳥風月。外からの光で、僕は陶然としてきている

## 武田五一の建築は「和魂洋才」を表わしている

「武田五一は、ヨーロッパに渡ってアール・ヌーヴォを学んで、日本に紹介しました。しかし、ヨーロッパの建築をそのまま日本で広めるということはしませんでした。彼は日本的なものを表現しようとしました」と米田さん。たしかに、武田は東京大学で、東京駅を造った辰野金吾に直接学び、留学を許された人、まさにエリートである。当たり前に考えれば、パリパリの西洋建築を作り続けてもおかしくないはずだ。しかし、武田の作品歴を見てみると、どこにも、むきだしの「西洋」がない。なぜだろう。技術はヨーロッパを取り入れたとしても、思想まで鵜呑みにして取り入れると、日本はヨーロッパの「心の植民地」になる。武田だけでなく、当時の知識人は、そう考えたのである。例えば、岡倉天心は日本の仏像の研究をフェノロサから学び、その保存に力を入れたし、夏目漱石は留学後に、日本の独自の文学の確立に動いた。武田五一の東京大学の卒業論文は『茶室建築について』であった。明治の日本の知識人にとって「和魂洋才」は緊急の社会的課題だったのだ。



離れの茶室　11代は残念ながらここで茶会をひらけなかった

## 西尾11代は武田五一の義理の父

ところで、この西尾家と武田五一はどのような縁があるのだろうか。「西尾家11代の養女である木下琴さんが、実は、武田五一の奥さんなんです」と米田さん。なるほど。年譜を見ると、その結婚は、大正11年、武田五一が50歳の時である。義理の父に当たる11代西尾與右衛門義成は、この時61歳、茶人として知られ、多くの文化人を招いて茶会を催していた。卒論に『茶室』を取り上げた俊才、武田五一である、10歳違いの兄のような義理の父と話も弾んだだろう。そして、武田は義理の父から「隠居所の設計をしてくれないか」と頼まれる。きっと、その設計について二人は熱く語り合ったことだろう。その結果として、「離れ」の作りには、「武田好み」の魅力と自由さが横溢している。しかし、大正14年、11代はなくなってしまう。あくる年、大正15年、この「離れ」は上棟する。残念なことに、11代は、武田に作ってもらった隠居所で茶会を開くことができなかったのである。

11代義成さん。武田の義理の父だ

## 武田五一の作品の「粋」

さて、「離れ」制作の後、武田は西尾邸の台所の調理台などにも武田好みのセンスを生かして作っている。例えば、日本調の調理台には、細部に折りヅルのレリーフが刻まれているし、細かな装飾が施されていたりする。また、大座敷の広縁には、冒頭で紹介したカットガラスの「広縁」のデザインに「武田好み」が見受けられる。そこで武田はのびやかに魂を込めている。

改めて、この旧西尾家に残された武田の作品を見ると、どこにも「脅し」や「はったり」がない。あるのは「数奇」というか「好み」というか、日本的な「粋さ」が印象に残る。

「日本」を表現しようとするとき、多くの芸術家が、馬鹿げた大東亜共栄圏などのキッチュな表現に陥いったという歴史がある。しかし、武田五一には、その堕落がなかった。彼は、明治・大正・昭和の三代を「和魂洋才」のポリシーで貫いた。その理由は、彼の生活へのまなざしではないかと僕には思える。例えば、堀炬燵の制作などに彼は夢中になるような「生活デザイン」のセンスがあった。小さな部分に光を見て、はったりの大きさに逃げなかったのである。

## 武田五一の作品は吹田市民への贈り物

「武田五一は人気があります。武田の作品の追っかけという人がたくさん展覧会に来ていましたよ」と米田さん。たしかに、武田五一の作品は、親しみやすくチャーミングだ。僕も、すでに追っかけの一人になっているかも知れない。ところで、旧西尾邸にある武田作品が、最近まで彼の作品目録には載っていなかったという。武田五一は自分の身内の家ということで、登録など考えなかったからだろうか。いま、新たに旧西尾邸における武田作品が研究対象となっているらしい。これがキッカケとなって、武田作品がもっと愛されたらいいなと僕は思う。旧西尾邸にある武田五一の作品は、まさに、吹田市民の誇りであり、かけがえのない彼からのプレゼントなのである。

「武田五一展」を仕掛けた米田堯さん。武田五一を語るとき、その熱がぼくに伝わった

■協　力■

●旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）吹田市内本町2丁目15番11号 ☎06-6381-0001　米田堯さん

■参考文献■


●「求道学舎再生」近角櫻子著　学芸出版社

●「方法日本・神仏たちの秘密」松岡正剛著　春秋社

●「日本の近代建築（上）（下）」藤森照信著　岩波新書

●「旧西尾家住宅・身近な文化財・建造物調査報告」吹田市立博物館

●その他、武田五一関係の膨大なブログ。